

# オープンプラットフォーム会議 Vol. 4 の 開催概要をお知らせします

日 時：令和2年1月19日（日）14：00～16：50

場 所：別府市公会堂

内 容：基調講演／元瀬戸内市民図書館長、奈良大学文学部教授 嶋田学氏  
パネルディスカッション／嶋田学氏

別府市新図書館等整備基本計画策定委員会委員 6人  
馬場正尊氏

会場ディスカッション／同上

出席者：216人

うちアンケート回収 100件（46.3%）（集計結果別紙）

うち質問用紙提出 32件（詳細別紙）

## **基調講演／元瀬戸内市民図書館長、奈良大学文学部教授 嶋田学氏**

岡山県瀬戸内市に赴任した2011年4月に、瀬戸内市が岡山県内で住民一人当たりの図書数、貸出冊数が県下ワーストワンという記事が掲載された。

図書館の状況として、公民館図書室のようなものしかなく、図書館費も大してかけてなかった。まず計画作りとともに、民主党政権時代の交付金を活用して軽自動車の移動図書館車を購入して幼稚園、保育園、全園にまず絵本を届けようと試みた。加えて、高齢者入所施設を訪問して貸出だけでなく、お話し会などを行い、期待感を高める取組を行った。

どうして図書館が必要と思ったか。滋賀県永源寺町の図書館で、箸袋の裏に「脊柱管狭窄症」と病名を書いて持参されたおばあさんがいた。手術を勧められ、「セカンドオピニオン」として本を求めた結果、本から情報を得て自分で納得された。こういう山奥の集落でそういう医療情報を求めている人がいる、本屋さんがいないような町だからこそ図書館が必要だということに気付いた。

また、70歳くらいのおじいさんが「あんたら図書館の準備をしているらしいけど、図書館なんかできても利用せんからな。わし、本なんか読まんからな」とそれだけ言って帰っていった。完成後、件のおじいさんが来館し、野菜作り、病害虫、農薬などの書籍をご覧になっていた。おじいさんにとっての図書館は、文学や小説を置いていて、そういった書籍を読むのが好きな人しか行かないというイメージだった。暮らし、仕事、申請など、夢のため、あるいは困ったことのために多様な資料、情報があるということをちゃんとお伝えできていなかったことを思い知った。

もう一つ、永源寺のエピソードを紹介する。普段、本など目もくれない小学校4年生の4人組が、ある日図書館に「おっちゃん、この虫、何ていう名前？」と駆け込んで来た。昆虫図鑑と一緒に調べた翌日、「おっちゃん、魚の図鑑ある？」って飛び込んで来た。鳥肌が立った。「この魚、何ていう名前？」ではなく、「図鑑ある？」と聞かれたこと、知りたい好奇心は図鑑が解決できるとわかってくれたことに対してである。

瀬戸内市では、住民参加による図書館づくりとして、2011年の11月に1回目の図書館未来ミーティングという市民ワークショップを実施した。鳥取県の片山知事に来ていただいたこともある。また、子どもたちの意見を聞くために、図書館未来ミーティング子ども編、企画運営委員募集をしたところ14人が手を挙げてくれた。全校アンケートを取ったりもしてくれた。講演会の企画も含めると、開館までに12回のワークショップを実施した。

市民の皆さんも、財政的に支援する目的で、オリジナルのステッカーを作り、1枚200円で4000枚を手売りで売ってくださり、40万円という寄附金を図書館基金に入れてくれた。図書館の植栽の水やりや、草むしりをしてくれる人も出てきて、開館の翌年1月に図書館友の会「瀬戸内もみわフレンズ」という組織が立ち上がった。文化的活動や音楽会、講演会などを幅広く展開してきた。瀬戸内ふるさとかるたを作って約200セットを小学校に学習材料として配ったこともある。この取組は佐賀県伊万里市図書館を参考にしている。

瀬戸内市民図書館の大きな特徴は、地域郷土資料との融合的展示である。図書館の工事をする事前調査で土器が出てきたので、図書館の入り口の床の下に1メートルくらい建築的に穴を作って、この土器を配置して自然と目に入るようにした。ここは学芸員が担当した。

図書館のない町に図書館ができて何が変わったか。小中学生、高校生が立ち寄る場になって、自習をして勉強してくれる。そこで出会った友達とお茶を飲んだりおしゃべりをしたり、若いお母さん、お父さんが子どもさんと一緒に来てくれて、本はもちろん新しい友達とも出会うことができるようになった。

図書館には、いろんなテーマの本による、いろんな情報提供ができる。図書館が図書館として自己完結的にやるのではなく、住民の皆さんとの共存はもちろん、多様な関連部門と連携することで、より豊かな情報提供ができる。

まちづくりにおけるさまざまな市民の皆さんの活動や情報提供の場や、一緒に課題解決をしていく協働を生む場になる。行政に対してのさまざまな施策の情報提供や各行政部門の施策PRも、図書館という不特定多数の人が大勢来てくれる場で行うことができる。図書館という空間で住民ネットワークが実現できると考えて活動している。

終わりに今回、「新しい公共空間づくりのための図書館とは」ということで、住民は自治の担い手、主権者であるという観点で、自分たちごととして図書館に関わる住民の皆さんの姿を、図書館の準備過程で直に見ることができた。また、住民の皆さんも要求ではなく対話、そして対話から協働、創造性を育むといった当事者意識というのがミーティングを重ねる中で生まれてきたと感じる。

図書館に見えてくる地域、現代、世界とのつながり、さまざまな情報を市民の皆さんと一緒に生かしていく中で町を育てていく、そのことの活動が町のデモクラシーを生む。最後に平田オリザさんの言葉「文化の自己決定能力を育むことが大切」という言葉を紹介して終わりとする。

## テーマ1

「新しい図書館にどんなことを期待しますか？」

中野

医療や福祉系の施設が多いので、そういう関係機関と一緒に何かできると、別府の魅力をつくる要因の一つになると思う。海外の方も多く住み、多様性があるし、職業もいろいろあるので、新しい別府の魅力を発信する場として図書館があるといい。

山出

中学生の娘が今日、友達と一緒に図書館に行くと言っていた。その時に「ふらっと立ち寄れる場所に図書館があるといいよね」と話していた。全ての人に開かれている場所、あとは能動的に調べ物ができる、今まで出会わなかった知識や人と出会えるといい。

塚田

NYなどではシェアオフィスという考え方があるが、サードプレイスは憩いの場に限らず、学び、創造、起業の場などになっている。それらは今後のまちづくりにも繋がってくるので、そのような施設になるといい。

平石

新しい公共空間には3つの分類があるように思った。静かな空間、これは従来型の図書館。次は市民課題を解決する場、そして、音や声が響く賑やかな場。従来の図書館機能を核としながら、別府ならではの新しい機能をどう取り入れるかが重要になる。地域課題を市民のみなさんとどう考えていくか、それには箱物と一緒にどう運用していくかの計画が重要だと思う。

## テーマ2

「学生がディスカッションやワークショップができる空間がありますか」

嶋田

瀬戸内では中学生の意見で、いわゆるグループ学習とかディスカッションしながら課題をするための小さな部屋が欲しいということでチャットルームという4人部屋を用意した。10人部屋もつくったが、少人数で入れるチャットルームの方が人気があった。

馬場

東京の武蔵野プレイスには、ティーンズルームという、利用者を20歳未満に制限した空間がある。

中野

医療関係で言うトリハビリや介護予防などのワークショップにも使える多目的なスペースがあるといい。

例えば、「読み聞かせ室」というものをつくると、一見読み聞かせ以外はしてはいけないんじゃないかという印象を受けるので、ネーミングも重要となる。

塚田

新しい企業あるいは NPO を立ち上げて市民に働きかける拠点のような場があるといい。新しい何かを生み出す拠点として、もちろんそこは有料で貸すことになると思うが、普通にオフィスを借りるより安く設定して、そういった動きを起こせるといい。

### テーマ 3

「新しい図書館は小学校、中学校、高校等、学校図書館との連携が重要だと思うのですが」

嶋田

まず資料収集。学校図書館には何冊置きなさいという基準はあるが、それぞれ選書方針も違うため、ネットワークすることにより、それぞれを補うことができる。

また、これからのアクティブラーニングといわれる学びを踏まえたときに、子どもたちの興味関心を踏まえた上で、学習するという意味では公共図書館を活用するということは絶対必要になるし、市民の方にも学校図書館がどういうものかというのを知ってもらう必要もある。

馬場

これは予算に関わることだが、今回の新図書館整備をきっかけにそれぞれの図書館の蔵書内容などを把握して、小学校から、できれば大学までネットワークして、配送サービスなどまで可能になるといい。

塚田

委員の中に「本のない図書館」と言っている委員がいる。新しい図書館が本で埋まってしまうと困る。連携することにより、みんなが寛げるカフェやサロンなど余裕のある空間をできるだけ確保し計画していくことが大切である。

### テーマ 4

「郷土資料の保存やデジタルアーカイブについて」

中野

旧別府市美術館には、農機具がたくさん保管されていた。資料として大切だが、常時同じものを展示していると皆さん興味がなくなるので、例えばテーマごとに話題をまとめて、それぞれの資料がどこに保管されているのかがわかるといい。

### テーマ 5

「新しい施設は、どのように運営されるのでしょうか。」

阿南

いろんな人にとって課題の解決につながるような空間であるべきだと考えたときに、全ての人が

関わる施設という認識においては、公民連携で市民のお役に立てる方法を模索したい。今の段階で指定管理や委託という運営形態は決定しておらず、基本計画策定協議の中で議論を深めている。繰り返しになるが、公民連携という形になる。

稲尾

偶然の出会いがあったり、予想外の発見があったり、新しい時代に対応した図書館を運営していく上で、最適な事業手法を検討していければと思う。公が担うべき部分と、民が担うべき部分、そしてその間にグラデーションがあるといい。どちらか決めつけずに、いろいろな手法を検討しながら、別府市ならではの手法を考えていければよい。

馬場

民に委ねるところは委ねつつ、公が責任をとるべきところはしっかり取る。市民だけではなく、民間企業についても、自分たちが関われる部分で関わることで、うまくバランスを取れるといい。塚田委員長が言うように、別府の図書館は産業が起きるとか、創造のきっかけの場所になるというようなことが強く打ち出されるといい。

塚田

新しい施設をつくるときに建設は公でやらざるを得ないと思うが、運営の部分はむしろ民が積極的に入ってきて、建設と運営を分けて考えると、運営の部分で市民、団体、企業の方に入ってもらい、官民連携ができるのではないかと。

## 会場ディスカッション／嶋田学氏、整備基本計画策定委員、馬場正尊氏

※受付時に質問用紙を配布し、休憩中に記入、提出されたものの中から事務局が抽出して、ディスカッションテーマとした。

### 質問・意見

#### 一言カード1

「観光産業を担う人材づくりが必要と考えていますが、どんな取り組みが考えられますか」

嶋田

瀬戸内市には専門家がないので、そういった経験のある職員を募集する。そして文化財に関しては学芸員などの経験等を生かした人材の募集を行った。

阿南

ツーリズムバレー構想による観光産業の人材育成にも力を入れている。図書館もツーリズムバレー構想のなかでどういった位置付けになるのか、そういったことも意識しながら取り組んでいけれ

ばよい。

稲尾

以前、嶋田さんと話したときに政策を図書館にしっかり反映するようとお話があった。別府は別府ならではの福祉、観光産業に従事している人たちが、例えば図書館に行った際に、必要な専門知識が手に入るようにしておく。また、そこで調べ物をするだけでなく、ディスカッションして、新しい何かを生み出せる場所であることが人材づくりにつながると思う。

## 一言カード2

「赤ちゃんを連れて利用される方々がたくさんいますが、マナーがなっていないなどの声などがあります。赤ちゃんを連れての利用を制限するべきでしょうか」

中野

核家族化が進み子育ての不安も多くある時代にあって、図書館に同じくらいのお子さんを連れての方が集まったり、経験のある人から話をしてもらったりできると子育てに対する不安も解消されていい。

嶋田

図書館は地域の子どもを育てる場でもあるので、例えば赤ちゃんタイムのようなものを設けて、何時から何時までは赤ちゃんが泣いたりしても大丈夫なようにする。もちろん賛否あると思うが、行く側も遠慮せず、嫌な気持ちにならないような空間を作れるといい。

## 一言カード3

「うちに不登校気味のこどもがいます。(中間省略)ただし、図書館なら行きます。不登校の子どもたちが、あそこならいいよ、と行ってくれるような図書館になるとありがたいです。」

平石

図書館は誰でも受け入れる場所であるべき、自殺防止のために9月1日に図書館へ行こうというキャンペーンもあった。

稲尾

公共図書館が学校図書館を補完するというような考えもあるが、逆に学校へ行けない子どもたちの受け皿に図書館がなるということも充分ありうる。事情があつて学校に行けない子どもたちもいるので、そういった場合に多様に子どもたちを受け入れる空間になるといい。

嶋田

鹿児島県指宿市でも不登校の高校生が図書館に通っていた。司書が、「絵本を読みましょう」と勧めたところ、楽しいという感覚を持ってもらった。次に「試しに子ども相手に読んでみる？」と誘っ

て、読み聞かせに登場してもらった。それによってコミュニケーションをとることに徐々に慣れてきて、その後は職業訓練施設に通い、資格を取得して社会に復帰されたというエピソードを聞いた。図書館はそういった自分の居場所や活動を創ることができる場でもある。

#### 一言カード4

「障がいがあるひと活躍できるアートの場がほしい」

中野

健常者も将来、いつ何時、事故などで車椅子に乗ることかわからないし、認知症になれば障がい者と同じような状況になる。障がい者が使いやすい、居心地がいい図書館であれば、将来自分がそうなったときにも居心地がいい。障がいを持った人にも開かれた場であるといい。

山出

ひとつはアクセシビリティという図書館への行きやすさ。バリアフリーは当然ですが、もう一つはどんな活動なのかが重要で、障がいがある人もない人も何らかの形で共有できるというのが重要だと思う。誰もが同じように体験ができる場所、それを図書館に作ろうとすると整理が必要で、図書館で知る、学ぶという機能と、活用する体験するという部分を二段構えで整理する必要がある。そうした活動づくり、プログラムづくりをきちんと設計していかないと運営が難しくなるので、その点を注意深く進めてもらえるとありがたい。

#### 一言カード5

「機能融合の話を興味深く聞かせていただきました。ソフト開発をするのであればその組織づくりと職員の能力向上が必要だと思います。その際のポイントを教えてください」

嶋田

瀬戸内では図書館部分は市の職員が（運営を）行うが、図書館は森羅万象、様々な分野の知識が集まるので、自分たちができることはごくわずかだということを理解した上で、例えば市民の方がこういうことをやりたいとなったときに上手にコラボレーションできるようなオープンマインドなコミュニケーションを心がけた。

コラボレーションの意義を明確にして、win-winの関係を築き、お互いに尊重しあうことがお互いにとってプラスになり、まちの発展にもつながるので、その精度がちゃんとデザインできているかが重要である。

平石

嶋田さんに質問。これから先、司書の役割が大変重要だと思うが、いかがか。

嶋田

図書館司書は辞書になることは難しいですが、インデックスになることはできる。これを知りたい時はこれを読むといい、あそこに行けばいいという情報をたくさん持っていればいいと思う。ウォーキングディクショナリーではなく、ウォーキングインデックス。

あとは何かを聞かれた時には、聞く側の方がより深い知識を持っているということを基本的に認識することである。

## 会場 1

「瀬戸内の図書館の運営の方法と職員体制というのを教えていただきたいです。まだ、いま検討委員会のなかで本のない図書館という意見も出てきているのですが、全く私には想像がつかず、本が豊かにある図書館を作って欲しいなと思っております」

嶋田

瀬戸内市民図書館は、市内にいくつかある分館を含めて正規職員が 6 名、臨時職員が 8 名、合計 14 名で運営している。

図書館費はだいたい 1 億円程度です。情報源もたくさんあるので、それらにしっかりアクセスできるということ、それから本や資料をただ持って帰るのではなく、いろんな人とシェアできる空間も指すのかもしれない。実は瀬戸内の図書館デザインミーティングでも「1 冊も本がない図書館」という意見が出た。そのときは電子書籍が世界中に普及していた頃だったこともありますが、しっかりと本があった上で、そのようなデータなどもうまく活用できればいいと思う。

追加で、司書の資格を持っている方の数を教えてください。

嶋田

全員司書資格を持っております。

## 会場 2

「これは図書館と美術館の構想のはずなんですが、美術館の話が一つも出てきてないんですね。そしてパネラーのなかにも美術館に関わる方がいらっしやらないので、その辺がどうなっているか副市長や教育部長にお聞きできればと思います。」

阿南

ご存知のとおり、美術館は老朽化にともない、海側から現在の場所に移ってきた。今度の図書館の計画の中では、今の美術館は本格的な美術館ではないと言われているが、そういったことを新図書館でも補完していければと思ひ議論を進めている。ご要望があるということも重々承知している。

稲尾

以前までは行政が造る施設は、全て図書館は図書館、美術館は美術館のように目的別に作られていた。最近できている評価の高い図書館をいろいろ見ていると、先ほど嶋田さんがおっしゃるように複合施設ではなく、機能の融合だと思う。目的別に混ぜるというよりは、掛け算で効果を高めるようなことが今求められている。

山出

今の時代、立派な OPAM も近くにあるし、財政的な問題もあるので、段階的に物が進んでいくとい



いなと個人的には思っている。新しくできる図書館の一部として美術館機能があり、これまでの美術館の形とは異なるけれど、図書館を中心にいろんな機能が繋がり、もしくは掛け算で新しいものが立ち上がって、また今後美術館が中心となる機会があるといいなと思う。また、展示する施設だけでなく、アーティストの活動の場として図書館が機能してくれるといいなと思う。

### 会場3

「司書さんの育成のウエイトが大きくて、今日三本柱という話があり、やはり地に足のついた図書館をこれから作るという時に、やはり司書さんを抜きにして新しい図書館育成というものはできないと私は思わざるを得ない。司書から出てくる現場の意見を大事にして欲しい。」

嶋田

司書さんが核になるという意見に基本的には同意する。

歴史のアーカイブについてはオープンデータにしてしまえば、検索ができて、画像も二次利用できるようにする。そうすると皆さんが検索して、みなさんが自由に活用する。もちろん元のライセンスはどこにあるかは明示して、専門的な知識については学芸員や図書館司書に繋ぐこともできる。デジタルアーカイブをいかにオープンデータにしているかが非常に大事と思う。

ただ大事だから保存するではなくて、現代性にあわせてうまく活用して、オープンマインドで使えるといい。

### 会場4

「駅前通りが魅力がないのもあり、あそこに図書館があったらどうなるか。再検討の可能性はあるか。」

阿南

民有地については、水面化で動いたが、所有者の意向や市の財政的な問題もあり、相手方に売っていただかないとどうしようもないこと。私も個人的には駅前が魅力的になるといいとは思いますが、事情をご理解いただきたい。

### 会場5

「早く図書館に詳しい専門家を決めていただいて、確実に計画を進めていただきたい」

稲尾

身分については司書に限らず、市役所全体の職員も非常勤が多くてこれから改善に向けて動いている。これから建物を作ることもさることながら、運用をどうしていくかが大きな課題になってくる。当然、どのように運用していくかという計画が先になってから建物がどうなるか決めていくつもりなので、ご指摘いただいたような方向に向かっていかなければいけないとは考えている。